別子山村断章

別子銅山へ行くことは、長い間の憧れだった。

二十数年前、愛媛大学に赴任して最初に持ったゼミ生との旅行で、新居浜側から車で別子を目指したが、当時は道も悪く、また雪が深かったため、東平（とうなる）付近で阻まれてしまった。

それから十数年後、再びゼミ旅行で別子山村を訪れた。このときは、筏津（いかだつ）山荘に宿をとり、旧別子を目指した。旧別子へは、人の足で歩いて上がるしかない。春分の日だというのに、雪がまだ残っていた。驚いたのは、道とその周辺が、すべて緑泥片岩の細い断片を積み上げたものであったことだ。かつてはその上に、接待館・醸造所・学校・劇場などなど、さまざまな施設が建設されていたという。気の遠くなるような営為である。インカの遺跡のようだと表現した人もいるとか。ダイヤモンド水の辺りまでは全員揃っていたが、大山積神社跡の辺りから雪がますます深くなり、一行のほぼ半数がここで脱落した。歓喜抗まで到達したメンバーは、切り上がり長兵衛の歓喜を実感した。

銅山越に立った時の感動は格別であった。北を眺めると、新居浜市の向こうに瀬戸内海が一望できた。また南の方は、高知を経て遠く大平洋がうかがえた。

さらに数年後「フィールドワーク」で、学生ら二十一名とともに村役場を訪れた。和田秋広村長（当時）は、私たちの質問に対し、役場の吏員を煩わすことなく、すべてひとりで丁寧に答えてくださった。村内の隅々まで知り尽くしている村長には、「西日本一小さな村」を維持していく誇りと自信とがうかがえた。

その後も、何度か村長にお会いする機会があったが、「今度から、交付税を削減すると言うてきましてなあ」などと、憂いの言葉が段々多くなっていくようだった。

そして今年三月末、別子山村は新居浜市に編入され、ついにその幕を閉じた。しかし、別子には豊富な資源がある。近代化遺産の地として、赤石山系の植物あるいは貴重な鉱物資源の産地として、また登山の適地として、それぞれ寄せる思いはさまざまだが、多くのサポーターが存在する。地方自治体としての村はピリオドを打ったが、住民の居住する地区として末長く存続していってほしいと願わずにいられない。